

千刈狸の呟き

アソーさん！ 聞こえませんか？

あれから毎日「救命センターから次々に受け入れを拒否された脳内出血の産婦が死亡した。あってはならないあの事件を受け……」の放送・映像・論説が続いている。この頃では、分娩時の脳内出血という病気が死亡原因ではなく、「受け入れ拒否」そのものが死亡原因、つまり、他殺だったかのように聞こえるから不思議だ。特に、選挙を目前にしている狐や貉どもは、『人命に関することで、急いで対応しなければ……』と大見得を切るが、『失策でした』とはダ～レも言わない。受け入れを拒否しなければならなかった医療体制にしたのは、為政者たちである狐や貉たちではなかったのか？ と、われわれ狸どもは悔しがらる。

受け入れ拒否の理由の総てが、NICU＝新生児集中治療管理室やMFICU＝母体・胎児集中治療管理室の病床、重症ベッドの満床か脳外科医・産科医当直医の不足で占められており、その殆どが（機具・ベッド及びスタッフ）の不足、つまり、需要・供給のバランスが合わない故の結果である。これは、この周産期緊急時医療に限ったことではない。

「聖域なき改革」とやら、「医療費が嵩むから医師を減らす」の論理で医学生を更に減らし、「医療費が嵩むから病床を減らせ」「医療費が嵩むから点数を下げろ」「医療費が嵩むから老人を病院から離せ」と、私的病院や地方公的病院の廃業を狙った結果が医師のやる気を殺いだ。一方、訴訟問題など、或いは「医師のクセに云々」などの世間様の医師への虐待は、当然のように危険な仕事からの撤退を余儀なくさせる。その結果、高度医療の担い手の不足を招き、第一次医療の混乱を招いているのである。

この状況を、霞ヶ関狐たちは、どのように『急いで対処する……』ののだろうか？ ○○会議・△△委員会とお偉いさんが会議を重ねているが、結果は、「まずは、地域の医師会さんに……」というのがお決まりの文句で、またまた狸たちの良心にその場を繕わせ、狐・貉の失政を拭っているようだが、選挙が終われば間もなく、『医療費が嵩むから……』と、またまた役人貉の算盤は同じ貉手で弾かれることになるのだ。

一施設に「土・日曜は原則として……」母体受け入れを拒否している所もあった。『日曜だろうと何だろうと分娩には待たがきかないのです！』と主婦は叫ぶ。『どんなに忙しくても命の問題だろう！（医者クセに）』と旦那が怒る。労働基準局では『週、44時間を超えて働かせちゃいかん！』と罰則を喰らわせる。一方、裁判官は（週80時間の労働医師に）『通常の範囲を超えたとは言いつれない……』とカタをつける。現場では、『緊急の患者ですぞ！』と怒られるのだが、許可ベッド数を「一人でも超えて入院」させると、医療保険サイドからは厳しい罰則を科せられる他に、「悪徳医」の汚名まで背負わされるのだ。権力の持たない可哀想な狸どもは、ただウロウロ・ウロチョロせざるをえず、本来の姿さえ取り戻せないでいる。が、立派狸たちは、『どんなことがあっても、患者の命を守るために医師は最後まで責任を持ち、医療の質を担保しなければならない』と断ずる。

聞こえませんか？ アソーさん！

（禿 狸）